1910年日英博覧会における美術出品
――国宝の出品と『特別保護建造物及国宝帖』をめぐって――

林　みちこ（筑波大学）

1910年（明治43）年5月14日から10月29日までの5か月間、ロンドン西部のシェパーズ・ブッシュに設けられた博覧会場「ホワイトシティ」で開かれたJapan-British Exhibition （日英博覧会)は、「万国博覧会の世紀」には珍しく日本とイギリス二国間の博覧会であった。

日英博覧会は、1902年（明治35）に締結された日英同盟の継続更新に際して両国の友好関係を強化するため、さらには対英貿易赤字を解消するための産業博という役割も担っていた。加えて、1912年（大正元）に東京で開催する計画を立てつつも中止となった幻の万博「日本大博覧会」に替わる国家的イベントでもあった。

この博覧会で日本政府が最も力を入れたのが日本の歴史・文化の紹介である。特に「古美術」を重点項目とし、「古美術」1,138点と「新美術」（同時代の美術）263点を出品し、展示面積でみると1893年（明治26）シカゴ万博のおよそ4倍、1900年（明治33）パリ万博の8倍もの広さの美術展示場を設けた。なかでも雪舟《秋冬山水図》（東京国立博物館蔵）などを含む33点の国宝出品を最大の見どころとしたが、この出品には賛否があった。東京美術学校校長正木直彦の回想によれば、国宝の海外搬出ということへの異議に対し、元老の井上馨が「国策的立場」から「群議を排してこれを断行すべき」と主張したために御物を含む国宝をイギリスに送ることになったという。また別の史料には、国宝出品に抵抗したのは「古社寺保存会」であり、「日英博以降これらの国宝を二度と海外に持ち出さない」という条件で了解したとあり、国宝が外交に利用されたとも解釈できる出品の経緯がうかがえる。

本発表では、日英博覧会の美術出品のうち、特にこの古美術出品に焦点をあてる。また、この展示に際して出版された内務省編『特別保護建造物及国宝帖』(1910年、審美書院、以下『国宝帖』)は、建築部門を伊藤忠太と関野貞、美術部門を岡倉天心が中心となって編集しているが、岡倉は1900年パリ万博の際に出版された帝国博物館編『稿本日本帝国美術略史』(1900年、農商務省、以下『略史』)で果たせなかった編纂主任の仕事をこの『国宝帖』に結実させたとの見方もある。本書は近年再評価が進んでおり、佐藤道信氏が『略史』に続く「第二の官製日本美術史」と指摘しているほか、建築史においては清水重敦氏が「日本建築の写真のフォーマットを完成させた」と評価している。さらに、『国宝帖』を出版した審美書院は日英博終了後にドイツ、フランスの各地を巡回して展示販売を行っており、日英博覧会が美術展示と出版の両面でイギリスのみならず欧州の日本美術受容に与えた影響は大きい。本発表においては、これらの論点を上述した博覧会の開催経緯や美術出品の背景に関連づけながら考察し、日本近代美術史における日英博覧会の意義を明らかにする。